

関心をもつことから

松阪市立中部中学校 1年 増井 奏太

北朝鮮の委員長と韓国の大統領が国境を越えて、握手したり、抱き合ったりするシーンがテレビのニュース番組で大きく取り上げられていました。また、アメリカが北朝鮮と会談をするという話題も毎日のように報道されていました。こうした時、テレビやインターネットで、「拉致問題の解決を期待する」といったコメントや記事をよく見ました。

僕は、「拉致問題」という言葉は聞いたことがありましたが、ずっと昔のことだと思っていたので、その「解決を」と聞いて、どんな問題なのかを詳しく知りたくなりました。そして、インターネットで「拉致問題」について調べてみた時に、「アニメめぐみ」を見つけました。

一九七七年、当時中学一年生だった横田めぐみさんは、さらわれ、北朝鮮に連れて行かれました。今の僕と同じ年齢の時に、突然、日常の幸せな生活をうばわれ、四〇年以上、あってはならない人生を過ごしているということになります。どう考えても、考えられないことです。アニメでは、めぐみさんをうばわれた家族がどれだけ苦しい思いをしてきたのかが描かれていて、そのつらさが伝わってきました。めぐみさんが日本からいなくなって、もう四〇年以上が経ちますが、めぐみさんの両親は、今もずっと、めぐみさんを取り戻す呼びかけを続けているということを知り、めぐみさんの両親の中では、めぐみさんは今も帰ってこなかった中学一年生のままなのかもしれないと思いました。

アニメで、めぐみさんの両親が、町でチラシを配る場面がありました。でも、通り過ぎる人たちは無関心で、受け取ってもらえなかったり、受け取っても捨てられてしまったりしていました。僕は、人権問題の解決は、その問題に関心をもつことから始まると思います。小学校の時に、アメリカのキング牧師の本を読みました。人種差別に暴力ではなく、抗議行動で立ち向かい、多くの人に差別のおかしさを訴えたキング牧師が残した言葉の中で、僕は、「私たちは敵の言葉ではなく、友だちの沈黙を覚えているものだ」という言葉を特によく覚えています。差別する人からのひどい言葉よりも、それを黙って見過ごしている人たちの方が残酷だという、この言葉に当てはめれば、「拉致問題」も、自分には関係ないとか外国との間のことだからどうしようもない、と考えることが、被害者や被害者の家族をさらに苦しめ、解決を遠ざけてしまうのだと思います。

「拉致問題」を解決するために僕にできることは、この問題を知っておくだけでなく、めぐみさんや両親、他の被害者や被害者家族の人たちがどんなこれまでを過ごしてきたのかを想像して、一日も早い解決を願うことだと思います。